長洲町立長洲小学校　校長便り　No.46

みんなの居場所

裏面の話題

裏面は修学旅行写真特集です！

令和4年11月4日(金)

経験則③「金銭感覚」

本校に限らず、他校でも経験したことです。「お買い物」をするのは、私たち大人も童心に帰って何かワクワクするものです。先日の「修学旅行」でも、子供達は大いに盛り上がりました。

さて、気になる場面がありました。子供達の「お金に対する感覚」です。今の子は「小銭を握りしめて」というシチュエーションは少ないのでしょうね。私が子供の頃、当たり付きのガムなど、当時は1個10円だったでしょうか、1個だけ買って「当たるかなぁ…」とドキドキしながら封を切ったものですが…。

私が経験した場面。例えば、地域や学校におけるお祭り等です。何を買うにも、1個ではなく数個まとめて買う子の姿がありました。財布の中には結構な額のお金が入っています。これを良しとすべきかと頭を抱えてしまいました。私が子供の頃は、いくらお祭りだから、バザーだからといって多額のお金を持つことは無く、せいぜいワンコイン（100円）くらいでした。保護者の皆様はどう考えられますか？　子供達のこのような行動は私たち大人に、金銭感覚の見直しを迫っているのかもしれません。お金の与え方、これでいいのかと考える良い機会です。

お金は大切なものです。何でもお金で済ますような風潮は、子供には特に悪影響を及ぼします。お金の管理はやはり大人がすべきであり、その使い方についてもしっかり教えるべきだと私は思います。

経験則④「SNS」依存

「SNS」は、加速度的な変化を遂げている現代社会の象徴的なツールであり、今後うまく付き合っていくことが出来なければ、社会の波に乗っていくことが難しいとも言えます。私達が普段生活していく中でも、「SNSありき」のコミュニケーションもあるくらいですからね。しかし、児童生徒の「メディア・コントロール」は喫緊の課題です。一言でいえば使い方が悪いのです。いわば「依存」です。常に手元にスマホが無ければ落ち着かない、保護者が取り上げでもしようものなら、逆切れして親に食って掛かる等の現象が起きています。これが児童生徒の将来に良い訳がありません。自戒の意味も込めて、私自身自分のスマホとの付き合い方を振り返ってみました。私の場合、当たり前と言えば当たり前ですが、電話やPCとして使うことがメインです。しかし、簡単な連絡はメールやラインのやり取りで済ますことが多く、いわゆる「ライン」は便利で、方法を工夫して使っています。使う時間帯はどうか？　そう言えば、食事をとっている時にスマホの画面を見ながら…、ということがありました。我が家ではスマホでゲームをすることはあまり無いようですが、大学生の双子の息子達は、大学や部活の仲間達と常に繋がっていたいらしく、ラインのやり取りは時と場所を選びません。最近は少し大人の使い方ができるようにはなっていますが…。「依存」が進むと病的な状況に陥ることもあるようです。最悪は「引きこもり」の状態でしょうか。そうなることの無いように私もアンテナを張っておきたいと思います。

シリーズ「自分を語る」#46

ナイトハイクの計画と参加申込書を配付して、次の日思わぬ反響に驚かされました。すべての子供達から参加申込書が提出されたのです。私は保護者の皆さんからの反応やこれまでの大変さから言って、少しばかり「行事実施が間違いなのではないか？」と弱気になっていました。ところが、申し込みの状況を目の当たりにし、このような行事を欲していた児童が多いことに驚き、更に行事参加にOKを出してくださった保護者の皆様に感謝しました。

記念すべき第1回ナイトハイクは、ノウハウの積み重ねも無い状態でしたので、全体のイメージとしては一言で言えば「夜に行う長い遠足」でした。私自身の危機感も低かったようでした。それでも、子供達はやる気満々で当日を迎えることになります。

下見で私が独歩した経験を基にコースを設定しましたが、嘉島西小学校を42．195kmのゴールにするためには多少遠回りするコース設定になりました。スタートはJR三角駅ですが、その後天草五橋の一号橋を一旦渡り、引き返してくるという変則コースとなりました。今考えてみればすごい話です、一号橋を徒歩で渡るのですから。辺りが暗かったので恐怖感はあまりなかったのですが、実際には相当な高さがあり、そもそもあの橋は歩いて渡ってよかったのかなと首を傾げる澤田です。

当時は、初めての試みということで宣伝もしました。役場、ラジオ局、テレビ局、新聞…、あらゆるメディアに取材依頼をしました。案の定、テレビ局、ラジオ局、新聞社、役場の取材がありました。嘉島町の役場は実際に職員を参加させ、行事終了後には広報紙の中に子供達の対談の記事まで載せて下さった程でした。

さて、実働部分の話です。第1回目のナイトハイクは先に述べましたように長い遠足でした。班も作らず、ただひたすら歩くだけです。当然のことながら、前半は快調に歩く子供達でしたが、徐々に差が出てきました。日付が変わる頃には、休憩の回数も増え、更には一人で歩く児童もちらほら。このような中で全体指導をするのですから、私は先頭と最後尾を数回行き来しました。私自身の足腰にも、下見では無かった痛みを感じながらの実働となりました。夜中の3時頃には保護者の車に乗る（乗せて先行に追いつかせる）等の動きも出てきました。携帯電話がまだまだ普及していない頃なので、私からの直接の指示も出せず、先頭と最後尾で何が起こっているのかさえもよく解らずに時間だけが過ぎていきました。最終的に4分の1程の子供が車に乗っていました。

ゴールした時、最後まで車に乗らずに歩き通した子供とそうでない子供の表情は明らかに違っており、私が描いたものとはかけ離れていました。私は「ナイトハイクを通して子供達に身に付けさせたいもの」について、悶々とした中で考えていくことになりました。この時を境に、ナイトハイクに限らず行事の理想的な姿を考えることになります。特に今回のような行事の理想形とは？　まず浮かんで来た事は「①全員が歩き通すこと」、「②競争ではなく協力が大切ということ」、「③達成感や充実感を味わうことができること」の3点でした。行事を実施する時、今では感覚的にこの様な要素を織り込んでいくことができますが、当時は経験不足による先見性の無さは否めませんでした。

完歩できなかった子供達をこのまま放っておく訳にはいきません…。　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）

Schiphol